

参加申込書にいただいたご質問 (Q&A)

Q1:科学的・非科学的な議論や意思決定

a:自然科学や技術でも、問題をどう定義するかによって答えが変わります。適切に問題が定義されれば、科学や経済は定量化した答えを出すことができます。しかし、選ぶのは社会であり個人です。コスト最小や利益最大だけによる評価のみで正解とすることはできません。

Q2:エネルギーは、あと何年？何に使うエネルギーが多い？

a:限りなく生み出すことはできるでしょう。エネルギーはすべての経済活動に使われます。既に、生存に必要な量よりはるかに多く、「文化的生活」「豊かな生活」に使っています。これをどのくらい削減する覚悟を持つ事ができますか？

Q3:エネルギー輸入に起因する巨額貿易赤字の影響？

a:経済は専門ではありませんが、富の流出に伴うGDPの縮小や、経済の停滞、国としての貧困化は避けられないでしょう。

Q4:エネルギーベストミックス

a:講演でお話ししますが、すべてを協働的に組み合わせる必要があります。

Q5:原子力にのコスト

a:ベネフィットとリスクー講演の通りですが、外部コスト（発電に直接関係しない人々、産業、地域に与える影響）が大きいです。
コスト構造：建設費が圧倒的に大きく、またほとんど国内です。
リスクの換算：講演でお話しします。「事故」以外のことは、内部化されていまして。。

Q6:温暖化・異常気象への影響のコスト換算

a:二酸化炭素放出への対策には国際的にかかるコストが決まっているので、リスクを貨幣換算することができます。

Q7:蓄電技術、電気、エコサイクルのコスト

a:実は蓄電は、発電にかかる費用より高いくらいです。需要に応じて発電したり、発電・蓄電システム全体として考える必要があります。
エネルギーは、電気よりも燃料の形での需要の方が大きく、また重要です。
エコサイクルはエネルギーシステムとしてより人類の生き方にかかわる、本質的なモデルです。

Q8:原子力の将来性

a:これから途上国での利用は大きく拡大するでしょう。とはいえ、完全にサステイナブルではないので、いつの日か限界が見えてきます。

Q9:原子力と再生可能エネルギー

a:講演でお話ししますが、どちらも実は環境負荷は少なく、原子力はひとつの発電所で多量のエネルギーを発生することができます。再生可能エネルギーはもともと存在するエネルギーですから廃棄物はありませんが、エネルギー密度が低いので、多くの土地と設備を必要とし、それが環境への負荷となります。

Q10:省エネ、電力市場、直流

a:省エネは、消費を抑え環境負荷を減らすのに最も効果的ですが、限度があります。経済や生活とバランスして考えるべきでしょう。電飾や液晶パネルも、無駄か効果的かは議論の余地があります。電力市場の自由化は目的と効果が複雑です。直流化は否応なく進みます。

Q11:地球の人口増加、エネルギー・食糧需給のバランス

a:これは国のセキュリティ問題なので、どの国も自分の国を中心に考えます。日本だけでなく人類の病理でしょう。地球全体と国の利害は普通一致しません。

Q12:エネルギー政策と費用

a:どのようなエネルギーを選択するとしても結局国民、消費者が負担することになります。

Q13:なぜ大量消費？

a:基本的には高度成長の結果です。日本は豊かさのわりにエネルギー消費が少ない国です。

Q14:太陽光発電や洋上風力の発電効率と有効性

a:発電効率は高くありませんが、元がタダなので問題ありません。有効性は、消費者の欲しいエネルギーをどれだけ届けられるかにかかりますが、あまりよくはありません。しかしそれは再生可能エネルギーの正しい評価法ではありません

Q15:シェール革命と日本のエネルギー安全保障

a:シェールガスは北米固有の問題で、日本への影響を過大評価すべきではありません。供給源が一つ増えたくらいに考えればよく、セキュリティにも関係しません。

Q16:原発のコストと環境負荷

a:それだけ見ればコストと環境負荷は相対的に低いですが、それが原子力の本質的な問題ではありません。